

盛況 33期8名参加

「卒業生の話を聞く会」

五十棲 浩二 (33期)



去る平成24年6月9日、文理選択を目前にした高校1年生を対象にした「卒業生の話を聞く会」に、同期である33期卒業生7名と共に参加させて頂きました。当日は、建てたばかりの新しい校舎で集合し、まずはその美しさに感動しつつ、懐かしの階段教室へ。建て替え間近のこの階段教室、入るのはこれで最後だろうな...などと感じつつ、いざ本番へ。

卒業生は医師・弁護士から商社・ベンチャー勤務まで幅広い分野で活躍するバラエティに富んだ面々。これまでのキャリアを紹介するとともに、後輩たちへのメッセージをそれぞれの立場から。

場から生の声として語りました。真面目な話あり、男子校には欠かせないちよつと甘酸っぱい話ありで、会場は大変な盛り上がり。「仕事でステイプ・ジョブズ氏にプレゼンをした」というエピソードを紹介する同級生もいて、話を横で聞いていた筆者も大いに刺激を受けました。生徒たちも大いに触発されたようで、皆メモを取りながら真剣に耳を傾けており、頼もしい限りでした。

後半の質疑応答でも、質問が引つ切りなし。「仕事のやりがいはい？」「通常の弁護士業務と国選弁護人の際のモチベーションの違いは？」「米国の大学に進学

する際の不安は？」といった質問が次々と出て、答える側の卒業生も真剣そのもの。会の終了後には、職員室前のロビーに生徒たちが10名以上集まって卒業生が質問攻めにあうほどでした。質問を受ける中で驚いたことは、海外への意識が非常に高いということ。夏休みに短期留学に行く「海外の大学に進学したい」といった生徒が多く、世界で活躍する人材が多教育つていくことを願うばかりです。

当日夜には33期卒業生が20数名集まって同窓会へ。在学当時お世話になった先生方にもご参加いただき、こちらも大変盛り上がりました。母校の在校生の役割に立って素晴らしい機会を頂くと同時に、同窓会のきっかけにもなり、一石二鳥(?)のイベントでした。

また、聖光学院では、「卒業生の話を聞く会」に続き、今年の夏には「聖光塾」のスキームを活用して、社会人の1日に付き添って仕事を体験する「ジョブシャドウイング」というプログラムを高校1・2年生を対象に提供する予定です。私自身もお手伝いさせて頂いており、在校生の受け入れ先として、卒業生にもご協力を頂いております。

「話を聞く会」を始め、今後も様々な形で卒業生が在校生を支えていく取り組みが一層活性化していくと素敵だな、と感じています。

昨年10月19日に79歳でお亡くなりになった関脩先生は、1958年の聖光学院創立時から18年間国語科教師として教鞭を執られ、校歌の作詞初め多くのご功績を残されました。その後は学習塾を開かれ中高生に国語、古文、作文等の指導をされた他、日本ペンクラブ会員として文筆活動にも力を注がれ、小説も出版されています。

先生を偲び、先生の思い出を残すために制作を進めてきた遺稿集『邂逅の妙を思いて』が10月に刊行されます。



『邂逅の妙を思いて』刊行 故関脩先生の遺稿集

「邂逅の妙を思いて」刊行のご案内は聖光学院校友会ホームページ (<http://www.seiko.ac.jp/kouyuk>) でもお知らせしています。

(聖光学院 関脩先生遺稿集刊行委員会)

●購入方法

1冊2000円です。購入を希望される方は、①氏名②卒業期③郵便番号及び住所④連絡先電話番号を下記まで電話、またはFAXにてご連絡下さい。振込用紙をお送りします。入金が確認された次第、本を送付いたします。

●連絡先

聖光学院 事務局「聖光学院 関脩先生遺稿集刊行委員会」宛

TEL 045(621)2051
FAX 045(621)2568

なお、「関脩先生遺稿集

シリーズ 第20回 卒業生のお店紹介



ヌッフデユパプ六本木

岩手の純正な食材愉しむビストロ

20期生、伊東拓郎です。同志社大学卒業後87年に西武百貨店有楽町西武に入社。当時、東洋一の規模と言



われた「酒蔵」にてワイン、洋酒の販売、仕入れに携わりました。西武を辞し、その8年間の酒蔵勤務の中で出逢った「縁」にすぎないように盛岡へと移り飲食店「ヌッフデユパプ」の開業に参画致した

のが1995年の事でした。150席を有するヌッフの店長として一喜一憂の日々をスタート。地方都市の景気は上がりようも無く、デフレ、価格破壊など、荒波に揉まれながらも、幸いに美味しい食を求めお客様との「縁」に恵まれ、山あり谷ありの17年が過ぎ

て今に至ります。皆さんご存知でしょうか?

ヘルシーで力強い味わいの「ホロホロ鳥」、すつきりと流れるような脂が魅力の「白金豚」、霜降りではなく赤身の旨味の「岩手短角牛」、岩泉の深山から届く「山菜」「キノコ」。地元ではあまりに身近に在るが故に当たり前の物が、他所者の私には感動の連続でした。2006年、ヌッフの経営を譲り受ける契機に、山や畑やワイナリーなど食の現場へ赴く時間を費やし、土に触れながら、岩手の「ゆるくない」自然に向き合う。寡黙ながら情熱溢れる生産者に、出逢い、取り引きではなく取り組みを語り合える事がイチバン

の財産なのです。そんななか起きた3・11大震災。店の存続すら危ぶまれる茫然自失の中、それでも立ち上がったのは静まり返った店内でとあるお客様から「美味しくて温かいものを食べて希望がわいたよ」と言葉を頂いたから。なればこそヌッフは前に進まねばならないのだと、この度、東京に新店を決定しました。本年1月「ヌッフデユパプ六本木」が産声を上げました。ガラス張りの清々しい店の向いに出雲大社東京分祀が!まさに「縁結び」の神様が見守る前、「人」と人「盛岡と東京」、様々な「縁」を結ぶ場となるよう願っております。有り難い事に、岩手の食材は素晴らしい評判良く、東京のお客様からもお褒めのお言葉をいただいております。

有り難い事です。常々「食

- ヌッフデユパプ六本木
〒106-0032 東京都港区六本木7丁目17-19 FLEG六本木の2nd F ☎03(6456)2525
- ヌッフデユパプ盛岡
〒020-0022 岩手県盛岡市大通2-4-22 サンライズタウン4F ☎019(651)5050
- facebookページ
<http://www.facebook.com/neufupape>



次の世代への遺言

『3・11後を生きるきみたちへ』

たくきよしみつさん出版

福島第一原発1号機が爆発した昨年3月12日午後、私はその現場から25kmに位置する川内村という山村の自宅にいました。取るものもとりあえず、妻と家を脱出した夜のこと、今では遠い昔のよきにも感ずります。避難から半年の間の記録として書き、昨春秋に出版した『裸のフクシマ』(講談社)に続き、岩波ジュニア新書から『3・11後を生

きるきみたちへ 福島からのメッセージ」を出しました。ジュニア新書とはいえ、前著以上に厳しいテーマ、内容を、包み隠さず書いています。放射能汚染を止められなかった我々の世代が、この後始末をしなければならぬ次の世代への遺言のつもりで書きました。マスメディアからは伝わってこない様々な情報、論点、視点も提示したつもりです。

聖光時代の恩師、故・井津佳士先生は、アポロ11号が月面着陸した翌日の授業で「これからはあのお月さんにゴミがあると見上げて見なければならぬ」とおっしゃいました。その言葉の重さ、深さを、私は今、改めて噛みしめています。月どころか、この地球に、とんでもないゴミをまき散らしてしまった世代のひとりとして。 (<http://takiki.com/> 11期生)